No.10
2002. 3. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発　　行　特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任　横川芳江
■編　　集　広報部
■事 務 局　〒222-0033
横浜市港北区新横浜2-8-4
TEL　045-471-5536
FAX　045-471-5543
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

CONTENTS

●あなたはアフガン報道をどう読みますか？●アフガニスタン伝えられない戦争●10周年記念イベント地球の木で出会う身近なアジア
●支援地から<プロジェクト最新情報>●インド地震被災地をいく●わかばのコーナー●映画紹介 家族で見て欲しい「神の子たち」

メディアリテラシー
あなたはアフガン報道をどう読みますか？

理事　筒井由紀子

報道は現実の断片

テレビがうそを言うはずがない、新聞に書いてあることは正しい…現在、私たちはおびただしい量の情報に囲まれ日々暮らしています。そして溢れ来るその情報が正しいかどうか考える間もなく、次の情報が入ってきて、またその情報も通り過ぎていく…時には一枚の写真が大きなイメージとなって人々の心に残ることもあります。反対にこの情報が、私たちの考え方や価値観の形成、選択の判断などにどれほど大きな影響を及ぼしているかということを皆さん考えたことがありますか？

「メディアリテラシー」とは、メディアが番組や記事をとおして発信する情報をうのみにせず、批判的に読み取る能力のことをいいます。東京大学の菅谷明子さんはその著書「メディアリテラシー」の中で、「メディアの送り出す情報は、現実そのものではなく、送り手の観点から捉えられたものの見方のひとつでしかない」と述べています。

昨年9月の「同時多発テロ」以来、日本中のメディアが一斉にニューヨークそしてアフガニスタンのことを報じました。ワイドショーでさえもアフガニスタン・パキスタンからの情報を流し続けていました。報道の様子、そしてその加熱ぶりにうんざりした方も少なくないでしょう。

作られたイメージ

たとえば日本のメディアでよく見られた映像ですが、「米軍のハイテク兵器による空爆」「自由を歓迎するアフガニスタン市民」「アルカイダの訓練ビデオ」などある事象の一面の様子だけを並べていくと、ひとつのストーリーができあがります。他の部分はほとんど見えてきません。では、海外メディアはどうでしょうか？韓国・中国では日本の自衛隊派遣に関して、日本の「軍事大国化」への懸念を報道していました。韓国ではこのような時は必ずと言っていいほど、自衛隊のパレードや訓練・基地の映像を流しています。日本で北朝鮮に関する事件が起きた時に流れる北朝鮮の軍隊の映像と同じ感じです。いかに「映像イメージ」の影響が大きいかわかります。

地球の木では「まず知ることからはじめよう」を合言葉に、交流先からの情報、日本在住の外国人の方からの情報など、地球の木の活動から集まってくる情報を中心に会員の皆さんに届けてきました。発信する側に自分たちを置いてみると、効果的に社会にメッセージを送りだすためには、メディアを検証し、その手法を利用することはとても有効なことです。これからの高度情報化された市民社会で、活発に活動していくためには、より主体的にメディアと関わることが求められているのです。

情報を分析する力をつけよう

今年地球の木はこの「メディアリテラシー」をひとつのテーマに取り上げます。海外メディアの報道、Webからの情報、現地を実際に訪れた人の報告、インターネット検索、などその手段はいろいろあります。ちょっと視点を変えるだけでもっといろいろなことが見え、視野が広がっていくはずです。そしてそれは、世界で今何がおこっているか、私たちに何ができるかを考えていく上での大切な情報となるでしょう。

アフガニスタン
伝えられない戦争

日本国際ボランティアセンター事務局長　谷山 博史

ヒサルシャヒキャンプの子どもたち

空爆は終わっていない

アフガニスタンの復興に世界の注目が集まっている。去る1月21日、22日に東京で 開催されたアフガン復興閣僚会議では1年間で18億ドル、5年間で45億ドルの資金協力が約束された。しかし、復興に向けた議論の最中にもアフガニスタンではまだ米軍による空爆が続いている。12月の半ば以降アフガニスタンでの軍事行動の報道はめっきり減った。私たちはもう戦争は終わったかのように思ってしまっているのではないであろうか。

犠牲者はだれ？

現在行われている米軍による空爆と地元勢力との協力による地上戦は東部のパクティア州や南部のヘルマンド州に重点が移っている。地域的には限定されているが、昨年までの空爆でアルカイーダやタリバンの主な軍事拠点がほぼ破壊されてしまったために、両組織の残党がいると思われる村々に対する攻撃に移っている。そのために関係のない村人が犠牲になっている。12月21日には暫定行政機構の発足式に向かうパクティア州の部族評議会のメンバーの乗った車両が空爆されて30人以上が死亡。12月29日にはパクティア州ガルデス近郊の村への空爆で52人の村人が死亡。1月3日には同州のカスカイ村、コドヤキ村への空爆で[illegible]人が死亡。先週もパクティア州コウスト付近で激しい空爆があったとパキスタンの地元紙は伝えている。

活気を取り戻してきたカブール市街

国際規模のメディア統制

こうした情報が私たちにはすでに伝わらなくなった。普通空爆の被害は犠牲になった村の部族長が非難の声をあげ、それをパキスタンの地元新聞が取り上げる。大手メディアが直接取材することはない。そもそも今回の米英軍による軍事行為は国際法の裏付けを欠いた超法規的行為であるために、戦場で違法な残虐行為があっても見過ごされてしまう。メディアによる従軍が許可されなかったために、報道は「大本営発表」に頼っているのが実情である。日本が戦時中に経験したメディア統制が、国際規模で私たちの情報源をコントロールしていると考えざるを得ない。

復興は人権と人道に反する暴力、違法な軍事行為を否定することからスタートしなければならない。なぜなら、復興協力が空爆やその背景となった周辺国、大国のアフガンへの軍事的・政治的な介入を糊塗することになりかねないからである。もしこうした介入が歴史の空白の中で忘れられてしまうとすれば、またまたアフガニスタンは外国の利害の争奪に翻弄されることになる。

復興におけるNGOの役割は？

アフガン復興会議では出席できるNGOが制限された。NGO自身による意見表明の機会も与えられなかった。復興プロセスの成否は復興事業の計画、実施、モニターにNGOが参加できるメカニズムが作れるかどうかにかかっている。復興の実情を現場で活動しているNGOの情報をもとに、援助国の市民が自分たちの政府を監視するしかないのである。

10周年記念イベント
「地球の木で出会う身近なアジア」

「学び、語り合い、思いきり楽しみたい！」というコンセプトで企画された10周年イベントは、講演あり、パーティーあり、ライブありの充実した半日でした。10年間の活動の意義を確認し、これからのあり方を展望し、エネルギーを蓄えるいいチャンスとなりました。そこから感じとったことをご報告します。

副理事長　丸谷士都子

講演：「手をつなぐアジアの女たちPART3-フィリピンから、レニーさんの10年」

●日本でたくさんの外国人が働いているわけは？

レニー・トレンティーノさんは、「横浜教区滞日外国人と連帯する会」のフィリピン・デスクで日本に住むフィリピンの人たちの相談を受けて来ました。

現在、世界182カ国で700万人のフィリピン人が働いています。1995年からは女性が増えてきました。アメリカでは医療スタッフやメードとして、日本では工場やパブで働いたり、日本人の妻となる例が多く見られます。多くは何の保障もなく、厳しい労働条件で働いています。最近はDV（配偶者などからの暴力）の相談が増えているそうです。

これだけのフィリピン人が海外で働くようになった背景にはグローバリゼーションがあります。貿易の自由化によって途上国の貧困を軽減し、持続可能な開発に行なうはずだったグローバリゼーションによって、ますます貧富の差を拡げてしまったのです。フィリピンでは日本の政府開発援助により多くの開発が行なわれてきましたが、その65%は有償です。さらに様々な条件がつけられ、利益が日本の企業に行く仕組みになっています。「これは平和時の戦争です。まるで武器をつきつけられているようです」と静かに語るレニーさんの声にフィリピンの人たちの悲鳴が聞こえてくるようでした。フィリピン政府は海外移住労働を制度化し、外貨を稼ぐためたくさんの移住労働者を送り出しているのです。

●「手をつなぐ」ことって？

では、私たちに何ができるでしょう？レニーさんがあげた例は意外なものでした。DVに苦しむ女性は日本にもいます。つらい体験を人には言わない日本人に対して、異国の地で全てを奪われたフィリピンの女性たちは、我慢できずに自分の体験を隠さずに話します。体験を共有することで共に暴力と闘う力が湧いてきます。また、レニーさんは暴力を受け離婚した女性たちが互助グループを作る手助けをしています。住み慣れない日本でのグループ作りはなかなか難しいのですが、そんな時に地域の市民グループと交流すると学び合うことができるのです。

苦しい立場にいる人のことを知ると、「何をしてあげられるだろうか」と考えがちですが、「互いに学び合う」ことがとても大切です。私たちこそ学ぶべきことがたくさんある、そんな交流が地域ごとにもっとあっていい、と感じたレニーさんとの出会いでした。

聞こえますか、ヒマラヤの風

チョウタリバンド・コンサート

ノリにのったコンサートでした！様々な大きさの竹笛と太鼓の音に誘われ、気分はすっかりネパール。子どものころ、鳥のさえずりを笛でまねたら鳥が返事をした（実演もありました）というほど音楽に親しんで育ったパンチャ・ラマさんとその仲間の演奏に酔いしれ、最後は踊りの輪ができました。

支援地から ●●プロジェクト最新情報●●

ネパールから

NGOを国家再建の力に

ナマステ！

ネパールでは4ヵ月にわたる政府とマオイスト（毛沢東主義者）の和平交渉が決裂し、各地でマオイストの暴動が頻発しています。11月23日、政府は3ヵ月の非常事態宣言を発令し、マオイスト掃討作戦にでました。軍隊とマオイストの衝突が毎日のように各地で起こっています。マオイストの影響力の強い支援地カイラリ郡でも、軍の捜査活動が行なわれ、夜間外出禁止令が出ているため、私たちはいまだ新しい識字教室のための教師トレーニングを始められずにいます。

SOARSの仲間は細心の注意を払いながら毎日を過ごし、ゆがめられた地域社会の建て直しにいかに貢献できるか考えながら、将来の計画を立てています。この間、私たちは50のNGOに対して地域づくりに関するトレーニングをいくつか行なってきました。多くの人々、政府関係者からの要請もあって、学習センターを作り、リーダーを育て、前向きな思考と行動を引き出すことにねらいを定めようと決めました。人はいくら技能や科学技術や富を持っていても、心からわき上がる情熱がなければ意味がありません。あちこちで人々の生活と地域社会が壊され、無力感が蔓延しています。これを改善するには、彼らの考えを「すでに起こってしまったこと」から「将来どうあるべきか」に向けるべきなのです。このような考えに沿って、私たちはトレーニングセンターを設立しようと決め、カトマンズ郊外に土地を購入しました。当座は、リーダーのトレーニングを行ない、将来的にはトレーニングセンター兼情報発信センターにしていく計画です。皆さんのご意見をお聞かせください。

SOARS ニルマラ K.C.より

デブラニ募金は事態が収拾するまでプールさせていただきます。

フィリピンから

チョリソで副収入を

ツブラン農場では毎年、有機農業に取り組む意欲のある、砂糖労働者や農民の子どもたち（16歳以上）に堆肥作りから米作、野菜の植え付け、収穫、家畜の世話まで、自分たちの村で複合的な農業で生活していくための6ヵ月研修を続けている。今年1月、卒業を迎えた研修生の特別トレーニングが1週間農場で行なわれた。題して「自宅でできる食品加工」。説明会に呼ばれて農場に着くと、なんとも香ばしい匂いがたちこめている。男女合わせて10人の青年たちがきれいに料理を盛りつけ、その横には「添加物を一切使っていません。ツブラン農場製造」のラベルを貼ったピクルスや鰯のオイル漬けのビンが並んでいる。試食品はフィリピンで最もポピュラーな白身の魚ミルクフィッシュを割いて、醤油ややし酢、にんにく、レモンで漬け込み焼き上げたものと、チョリソ（豚挽き肉・にんにくに様々なスパイスを混ぜ腸詰めにしたソーセージ）農場で青年たちが育てたニンジンやキュウリ、なすびを使ったピクルス。どれも市販のものと比べると味が濃くておいしい。チョリソは子どもたちの大好物で、町でも村でも人気の朝ごはんのおかずだ。研修生たちがこれから自分たちの村で農業と同時に加工食品の販売で副収入を得ることがこのトレーニングの目的だった。

「すべてオーガニックです！」と材料と調理方法を自信いっぱいに説明する研修生に、農場代表のペン神父がいたずらっぽく「ところでいくらで売るのかね」と質問する。商売に慣れていない子どもたちは原価計算も頭になく返事に困り、「いくらでも買ってくれればいいです‥」これを聞いた講師は「次回のトレーニングは商売の方法まで組み込まなきゃ」と頭を抱えるなど、笑いと満腹感に満ちた試食会だった。

（JCNC　大橋成子）

大事に育てて…

カンボジアから

新しい仲間と子どもたちの野菜畑

新しい仲間が二人（10歳と8歳の兄妹）増え、我らがチャイルドケアセンターはさらに賑やかになりました。この二人の父親はエイズでなくなり母親もHIVウィルスに感染しています。センターに来る前は母親と祖母と一緒に暮らしていました。母親は蓮の実の加工、祖母はにんにくの皮むきと選別をして生計を立てていましたが、母親の体が日に日に弱ってきて最近は随分痩せて歩くのも大変な状態です。二人とも最初は母親を恋しがっていたようですが、最近ではすっかりセンターでの暮らしにも慣れ、他の子どもたちにもとけこんでいます。

さて、子どもたちの畑には、様々な野菜が育っています。ささげ豆、ナス、トマト、空芯菜、パパイヤなどがすくすくと育ち実を結んでいます。大きい子どもたちは学校に行く前や、お昼に帰ってきた時、又は夕方、水遣りや草取りなどの手入れをしています。小さい子どもたちは頼まれなくても自分からすすんで手伝い、自分の担当の畑がないので「このナスはシナー姉ちゃんのナス、ほら、大きいだろう！」「ここはポラー兄ちゃんの豆。甘くておいしいよ。」などと言いながら私を案内します。作物を育てる、という作業をみんな楽しく喜んでやっています。大根はかなり虫に食われしまってほとんど売り物になりませんでした。今回植えたナスやトマトのできは割とよさそうなのでよい値で売れることを期待しています。

（るしなスタッフ　山下　望）

ラオスから

ジェンダー研修は男たちを変えたか？

男女平等の社会をめざして

2001年7月にJVCとカムアン県は2年間の活動延長契約を結びました。その目標の中に、村人と県、郡の地方行政官を対象にしたジェンダー活動の理解と実施があります。

JVCはカウンターパートである県の女性同盟とともに、地方行政官がジェンダーへの理解を深めるよう研修を行ないました。8月にタケーク郡、10月にセーボンファイ郡で、男女行政官約20人が参加しました。

内容は、ジェンダーの説明、基本的な考え方、男女の役割、北京女性会議の話、法律の内容、男女問題が生じる原因と対策、ジェンダーの意識化等で、JVCと女性同盟で作成したジェンダーハンドブックに基づいて研修を行ないました。

両郡ともこれまでは、郡の決定事項は男性の意見で決めていました。また、女性も意思決定は男性主体との意識が強く、意見を出すことはありませんでした。今回の研修で、男性行政官は女性の考えも大切だと思い、今後は、女性も一緒に意思決定を行なうよう努力していきたいと話していました。以前からの習慣が今回の研修のみで、簡単に変わることはないかもしれませんが、男性行政官にとってジェンダーを意識するきっかけになったことは間違いありません。

更に、JVCと女性同盟は、郡、村の開発、発展には女性の参加が不可欠なので、意思決定に女性が参加できるようにしようと、今後のジェンダー研修及び活動について計画を立てています。

（JVCラオス・カムアン事務所　飯田敏博）

インド地震被災地を行く
住民主体の復興支援

NGOと住民との試み

事務局長　飯田 信子

2001年1月26日、インドのグジャラート州で大地震が発生し、家屋全壊339,000戸、死者20,086人、被災者15,857,541人、被害総額5,382億円という大惨事になりました。神奈川県、(財)神奈川県国際交流協会と県内の10のNGO団体とでいち早く、かながわ被災地NGO活動支援委員会を設置し、現地の人々の生活復興のための募金活動を行い4,069,189円のご寄付をいただきました。

委員会では信頼できるNGO2団体DMI(Disaster Mitigation Institute)・ASAG(Ahmedabad Study Action Group)に寄付金を委託することを決めました。あれからちょうど1年がたち、委員会を代表して復興状況を視察してきました。

グジャラート州のアーメダバードは、世界銀行やアジア開発銀行からの資金でほとんど復興されていましたが、地方によってはまだ手つかずの状態です。アーメダバードから車で3時間のナニボル村は最下位のカーストの約400世帯の小さな村。所得も他の地域から比べると2割は低い。レンガを積み上げただけでトイレや窓のない暗く狭い家に住んでいました。このような建築方法では阪神淡路大震災のような大きな地震が起きると、ひとたまりもないことは想像できます。

地震当日、村人たちは畑仕事で家をあけ、子どもたちは小学校の校庭で独立記念式典に参加していましたので、幸運にも犠牲者が出ませんでした。しかし、政府は援助対象を犠牲者がでた村に限定していたため、この村は支援を受けることができませんでした。そこで村委員会では、会議を開き、15年前からこの村で支援活動を進め、村との信頼関係ができているASAGへ支援要請することをきめました。

住民の意見を取り入れて再建が進むナニボル村

ASAGは、1974年に設立され低所得者への災害支援・スラム立ち退き問題・ストリートチルドレンなどへの支援活動を行なっています。ASAGでは、まず村人たちに建築についての知識や情報を充分伝えました。そして、個々の村人に合った支援を行うことにしました。村人の状況を把握するために、各村人は建設資金をどれだけ出せるか、食糧やまぐさを貯蔵する場所がいるか等の調査を行ないました。

新しい家屋は、レンガの間にコンクリートを流し、鉄枠を入れて耐震構造にし、窓やトイレを設置して住環境を改善しました。また、ASAGとのコミュニケーションを大切にして建設作業に村人は一緒に参加し、自分の希望をできるだけ取り入れてもらえるようにしています。全壊65、半壊35の再建はこのように進んでいます。

世界銀行やアジア開発銀行の復興支援金は、建物や道路等ハード面に使われています。現地NGOは村人たちの視点にたって低所得者の支援活動を進めています。

確かな手応えと嬉しい誤算

大学生が出前講座を体験！

■加藤奈帆美（大学4年生）

「本当に楽しかった！」―これが私の素直な感想です。地球の木に参加してから3ヵ月が経ち、はじめての授業でしたが、今まで体験したことのない驚きと発見に満ちあふれた素晴らしい経験ができました。

何より、担当した1年1組の生徒の皆さんが元気いっぱいで、積極的に授業に参加してくれたことが良かったと思います。特に、マジカルバナナのロールプレイでは４つのグループが、それぞれバナナを作るフィリピンの人々になりきって演じてくれたことに感激しました。私は写真を見せながら、グループを回って感想を聞いたのですが、「お父さんの手伝いをしてえらい」「学校に行けなくてかわいそう」「大変そう」など、生徒たちから様々な意見が出ました。

一人一人じっくりと感想を聞くことはできませんでしたが、最後に、バナナを使って世界の食糧配分を示した時は、ファシリテーターの中野さんの話にじっと耳を傾けていて、その真剣な表情から生徒の皆さんも授業を通して、なにかを受け取ってくれたのではないかという確かな手応えを感じました。

生徒たちの反応に感激！

そもそも私が、開発教育に関心を持ったきっかけは、日本に暮らす外国人女性を支援するボランティア活動で、アジアの女性たちと接する機会に恵まれていたからです。彼女たちは日本という閉鎖的な社会の中で、辛い思いをする場面に遭遇することもありますが、明るく前向きで、家族思いなのです。そのやさしい彼女たちから、いつも私が逆に“元気”をもらっていました。その中で、もっと多くの人にアジアのこと、世界のことを知って欲しいと感じるようになりました。

そして、「小さい頃から様々な国の人々と触れ合ったり、その文化や考え方を知るきっかけがたくさんあれば、きっと子どもたちは大きくなっても相手の文化や考え方の違いを受け入れていくことのできる柔軟な心を持った大人に育ってくれるのではないか」と考えていた私は、偶然にも「地球の木」に出会い、その活動に参加することになりました。

大学4年の終わりにして、こんなに勉強するとは思ってもみませんでしたが、それも私にとっては嬉しい誤算です。というのも以前から、子どもたちに異文化の楽しさを伝えていきたいと強く思っていたので、「地球の木」の活動に参加できることにとてもやりがいを感じています。

3月には、私がファシリテーターとして授業をすることが決まっています。今までアジアの女性たちが教えてくれた「言葉や文化が違っても、同じことに悲しみ、怒り、そして笑える」ということを、少しでも子どもたちに感じてもらえるように、また、世界のことがもっと知りたいと思ってもらえるように、がんばりたいと思います。

（藤沢市立善行中学・国際理解教育講座に参加して）

地球の木
自主上映

家族で見て欲しい「神の子たち」

感動のドキュメンタリー

「神の子たち」上映委員会 新井 克巳

この映画はフィリピンの首都圏のゴミ捨て場である「パヤタス」スラム街で生活している住民92,000人の暮らしを描いたもので、その中の3家族の生活を生々しく、しかしある面では冷徹なカメラの目で捉えた四ノ宮浩監督のドキュメンタリー映画です。フィリピンでは先天性障害を持って生まれた子どもは「神の子」と呼ばれ、この映画にはそれらの子どもが登場します。

この中で登場する家族は自分たちの生活の糧を全て“ゴミの山”から得ています。空きカン、空きビン、鉄くずを拾いそれを現金化して、なんとか暮らしをたてています。

しかし、ある時フィリピン政府はゴミの搬入を4ヶ月間全面的にストップしてしまいます。その間、住民たちは“飢え”に直面しますが、自分たちの生存が脅かされている極限の状態でも「誇り」と「家族愛」を失わないで生きていく人たち。その人たちの姿を見ていると、現在の物があふれた飽食の日本では体験できない生きることをかけたギリギリの生活の中での「親子の愛情」「家族愛」がヒシヒシと伝わってきます。

●上映日時場所　4月19日(金) 関内ホール小ホール
開場18：30　開演19：00
4月20日(土) 横浜女性フォーラムホール
開場18：00　開演18：30
上映時間105分

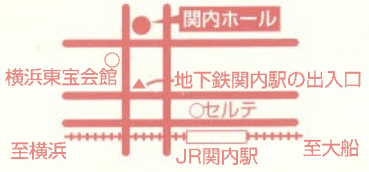
●主　催　特定非営利活動法人　地球の木

●料　金　前売り券1,200円(税込)　当日券1,500円(税込)

●後　援　横浜市教育委員会　横浜市PTA連絡協議会
(財)神奈川県国際交流協会　(財)横浜市国際交流協会
(財)川崎市国際交流協会

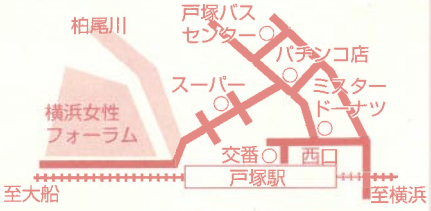
●問合せ申し込みは　地球の木事務局　担当　戸代澤
TEL.045-471-5536　FAX.045-471-5543

■関内ホール　Tel.045-662-1221



JR関内駅北口下車(徒歩5分)
地下鉄関内駅下車（徒歩3分)
東横線桜木町駅下車（徒歩7分)

■横浜女性フォーラム　Tel.045-862-5050



JR・横浜市営地下鉄戸塚駅下車(徒歩7分)

人間とは、もううしろがない断崖絶壁(絶対絶命)の状況になり、【死】というものを意識すると、前向きにいきるかもしれない…。そして、家族とは大変であればあるほど、家族の絆を強めていくのかもしれない…。

「神の子たち」監督　四ノ宮浩

INFORMATION

総会のおしらせ

日　時　5月25日(土) 13：00～15：00
場　所　オルタナティブ生活館　オルタリアン
総会終了後には楽しいワークショップも予定しています。

広報ボランティアを募集しています。

ご寄付ありがとうございました

中嶋　寛　坂下　まさみ　岩田　安正
薙野　和子　秋庭　美知子　柏木まり子

事務局よりお願い

●転居される場合は新しいご住所を必ずご連絡下さい。
●会費の自動引き落としをご希望の方はご連絡下さい。

本紙は古紙配合率100%の再生紙を使用しています